日本歯科医史学会会誌・第14巻
第2号通巻51号・昭和62年12月

東京歯科医学院の学制・教授陣・教科書等について*

長谷川正康** 森山徳長** 石川達也** 高添一郎**

1. はしがき

本学会第14回学術大会において，われわれは，現在の東京歯科大学の前身高山歯科医学院創立当時の10年間の歴史を報告した[1].

今回は引続き，高山院長からの禅譲を受けた血脇守之助が，校名を東京歯科医学院と改めて明治33（1900）年2年月開校し，40（1907）年9月，専門学校令により，東京歯科医学専門学校となるまでの7カ年半の歩みについて述べる.

2. 東京歯科医学院開設当初の事情

血脇守之助は，明治3年千葉県我孫子宿の富裕な旅館加藤家に生れ，のちに外戚血脇姓を嗣いだ. 幼時からその才を顕し，尋常小学校4年の課程を3年半で修了し，郷里の漢学塾に学んで漢籍に長じたが，時流を見て英学を志して12歳の時から東京に遊学，あちらこちらの英学校に学んだが，最終的には明治22年に20歳で慶応義塾を卒業した.

新聞記者，中学校英語教師を経て，明治26年春高山歯科医学院に入学した. 入学当初から，高山院長の外遊に際して特意の英語力を発揮した補佐力を評価され，学院幹事に登用された. 28年7月には医術開業歯科試験に合格.

試験合格後は，同院治術学講師と幹事を兼任し，さらに30年よりは附属医院の経営を院長より委托された（図1）.

図1 血脇守之助院長肖像 30歳の頃

Fig. 1 Portrait of Dr. Morinosuke Chiwaki (ca. 30 yrs.)

この異常の抜擢には理由があった.

これより前明治29年夏，ドクトル田原利のすすめで血脇は，会津若松渡部鼎ドクトルの会陽医院向いの旅館で，夏季出張診療所を開いたが，その時会陽医院の学僕野口清作と出逢っていた. その秋血脇をたよって上京した野口を学院に寄宿させ，既成事実を作って学僕とし，医術開業試験の勉強をさせた. 同じ頃熱心に血脇を頼って来た石塚三郎も，学院の受付・会計係として同宿するようになった. このため高山院長は血脇の月給を4円から7円に上げてくれた. そして明治30年の初夏の頃，野口は秋の医術開業後期試験の受験のた

---

* On the Curriculum, Faculties, Text-books etc. of the Tokyo Dental College.

** Masayasu Hasegawa, Norinaga Moriyama, Tatsuya Ishikawa and Ichiro Takazoe, (Tokyo Dental College 東京歯科大学)

本論文要旨は，第14回日本歯科医史学会総会・学術大会（1986年10月18日於東北歯科大学）で発表した.

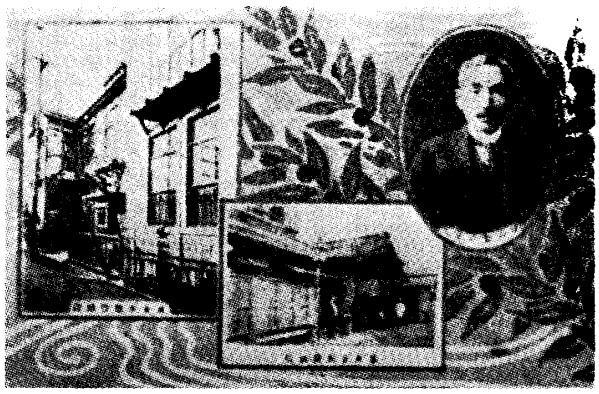

図 2 東京顕微鏡院と遠山椿吉院長（宇留野勝弥「遠山椿吉」による）

Fig. 2 Tokyo Microscopical College and Dr. Chinkichi Tohyama

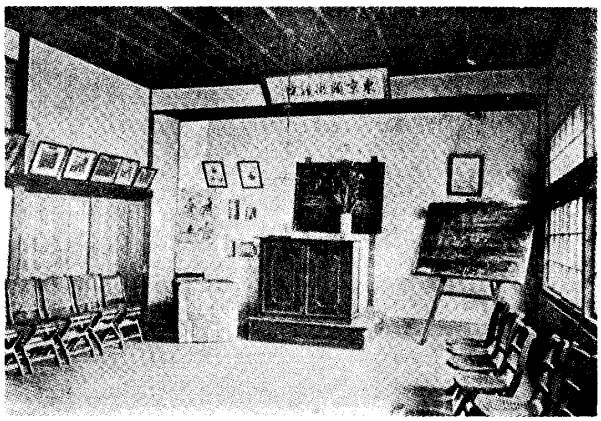

図 3 東京顕微鏡院講堂（雑誌「顕微鏡」による．谷津教授恵与）

Fig. 3 Lecture hall of the Tokyo Microscopical College (Courtesy of Prof. M. Yatsu)

め済生学舎に入学させて欲しいと，血脇に頼み込んだ．毎月15円はかかるこの申し出に，思案した血脇は高山院長に，附属医院の経営をまかせてもらえないかと頼み込んだ．血脇には経営上の自信があった．日頃赤字続きで困っていた院長は，この厚かましい血脇の申し出を，大英断によって許可せざるを得なかったのである．こうして血脇は一医員から，附属医院経営を切り盛りする責任者に昇格したし，そのお陰で野口も，後年の勇飛の資を得ることが出来た．

翌明治31年，日本医事週報社社長川上元治郎に推薦された血脇は，清国に渡ることとなった．漢籍と共に英語を能くし，医政力のある人という条件にぴったりの人選であった．7月に出発して芝罘・天津・北京・上海を巡り，歯科医療を通じて日清親善の実を挙げ，翌夏帰国した．

血脇の留守中，高山歯科医学院の勢力はとみにかたむいてしまった．守之助は，帰朝後精力的に院務に励んだが，清国巡回中から想い描いていた新天地台湾への渡航を決意して，院長に辞表を提出した．

高山院長は，血脇が帰国してやれやれと安堵した矢先であるので許す筈はない．驚愕して慰留にこれつとめた．院長はかねて学院の経営に困難を感じていた．それは学問の進歩につれて施設の改善も必要であり，経費は膨張するばかりで，一時守之助が経営の立て直しを計って成功するかに見えたが，彼の渡清で再び経営困難に陥り，維持し切れない状況となっていたからである．

院長高山は，本邦唯一の歯科医育機関を閉鎖したくなかったこと，そして自身の名誉も傷つけたくなかったので，学院を血脇に譲渡して，自らは隠退する決意を固めた．

師の信頼に感激しながらも血脇は，渡台の希望も捨て切れず悩んだが，32年12月某日，遂に師の恩顧に従う決断を師に告げた．

この様にして高山歯科医学院の歴史にピリオドが打たれ，次の発展に一歩踏み出すこととなった次第である[2~8]．

3. 校舎の変遷

1）間借り校舎（教室）時代

血脇守之助が恩師高山紀斎から譲り受けたものは，各種学校としての学院の名儀と，机13脚，ランプ6コだけであった．

血脇は，学院継承手続にあたって，人心を一新するために校名を『東京歯科医学院』と変えた．そして，芝高輪は地理的に不便であったので，高山歯科医学院講師として親しかった遠山椿吉が院長をしている，当時の新興文教地区であった神田小川町1番地の，東京顕微鏡院の2階教室を夜間だけ借りて，1900（明治33）年2月に開校した．（図2．3）

開校式は2月12日，神田の青年会館に，医・歯・政・官界から一流の人士200名を来賓として招待し，盛大に挙行した．その効果か，高山歯科医学院から引継いだ10数名の学生は，この春の入学希望者を加え50名余となった．

また学校経営の資金造りのため，三崎町2丁目の借家を借りて血脇歯科治療所を開設した．

9月には顕微鏡院を立退かねばならぬ事情が生じたので，三崎町1丁目3番地大成中学の教室を午後4時以降借りて移転，9月3日から開講した．

血脇院長は日夜校舎問題で苦慮を重ねた．

2）新校舎移転と拡張・新築

たまたま血脇診療所の隣家平岡熙邸を買取って欲しいとの話が持ち込まれ，交渉の結果3,000円で譲り受けることとなった．血脇は手付金1,000円を介立社社長川関治恕から，2,000円を森和吉に借りて，この元旗本屋敷を入手した．そして川関の周旋で1週間後登記所に行き，4,700円の抵当権を設定，その場で川関に1,000円を，帰路森に2,000円を返済し，1,700円を手にして悠々と帰宅した．

この様にして1901（明34）年1月に，突然の様に無から有を生ずる奇蹟が起って，自前の学校と診療所が生れることとなった（図4）．

とり敢えず，1月中に急拠診療所と教室に改築し，電灯をつけて教室とし，2月1日開講することが出来た．高山前院長から譲られた例の6個のランプは，これで不要となった．

この移転と共に34年4月の新入生は一挙に129名となり，夏休み中長家の一部を改造して，教室を拡張した．

1905（明38）年4月には生徒数の増加と，専門学校を目指して学制を2ケ年半としたのに合せて，その夏，血脇宅を取壊して大講堂と技術実習室1棟を完成，翌年39月4にはさらに，本館2階実習室の増・改築を完成した．これで学院の面目は一新された．

またこれも同じ森山松之助設計の瀟洒な2階建の血脇歯科診療所も学院左隣の敷地に完成し，白亜の学院と共にようやく学校全体の建物・施設が充実したものになった（図5，6）[2,5,7,8]．

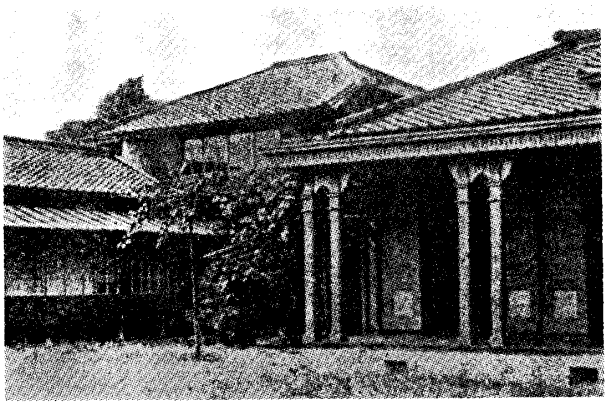

図4 明治34年3月頃の元旗本屋敷を改造した血脇歯科治療所（右手）と母屋（今田・「歯史料」による）

Fig. 4 Chiwaki Dental Clinic (right) and Tokyo Dental College as of March 1901. (The old building of samurai-residence style was repaired for the class-rooms and clinic.)

4. 学制・教授陣

開校当時の学制は，修業年限2ケ年，4月より前期，9月より後期とした．前期入学者は当分無試験入学とした．また，医術開業前期試験及第者，歯科学説前期及第者，および院外修業者は，無試験で後期編入学を許可した．

明治38年4月からは修業年限を2ケ年半に改めた．さらに39年9月には，専門学校令による昇格に備えて3ケ年とし，学年開始を9月とした[5,7,8]．

〔撰科生および院外生〕

普通医学生で歯科学をも履修しようとする者のために，無試験で1～3科を撰んで聴講することを許した．

通学不能および遠隔者のため，院外生の制度を設け，本院前後期の講義および公開課外講演を筆記・印刷して頒布し，修業年限を15ケ月とした．また随時入学を許可し，その課程を終っ時点で希望者には学力テストを行い，修業証書を授与して本院院友とした[9]．

〔学費〕

入学金3円，授業料1ケ月2円．撰科生は1科

図 5 東京歯科医学院校舎（明治39年４月，水道橋駅側より撮影(.

Fig. 5 School Bu lding of the newly built Tokyo Dental College as of April 1906.

目50銭．院外生（講義録購読料）入学金50銭月謝１円であった．

〔講師および授業時間〕

明治33年２月当時の時間割と担当講師は，表１に示した通りである[8]．

〔教授陣〕

33年度の専任者は，院長の外に広瀬武郎，奥村鶴吉（高山歯科医学院卒）と，33年春卒業の深沢（早川）可美良，武藤登喜次郎のみであったが，35年花沢鼎，36年水野寛爾が，また40年川上為次郎が卒業して教授陣に加り，また36年には米国より帰朝した佐藤運雄を専任者として招聘した[10]．

東京歯科医学院講義録第１号（33年３月25日発

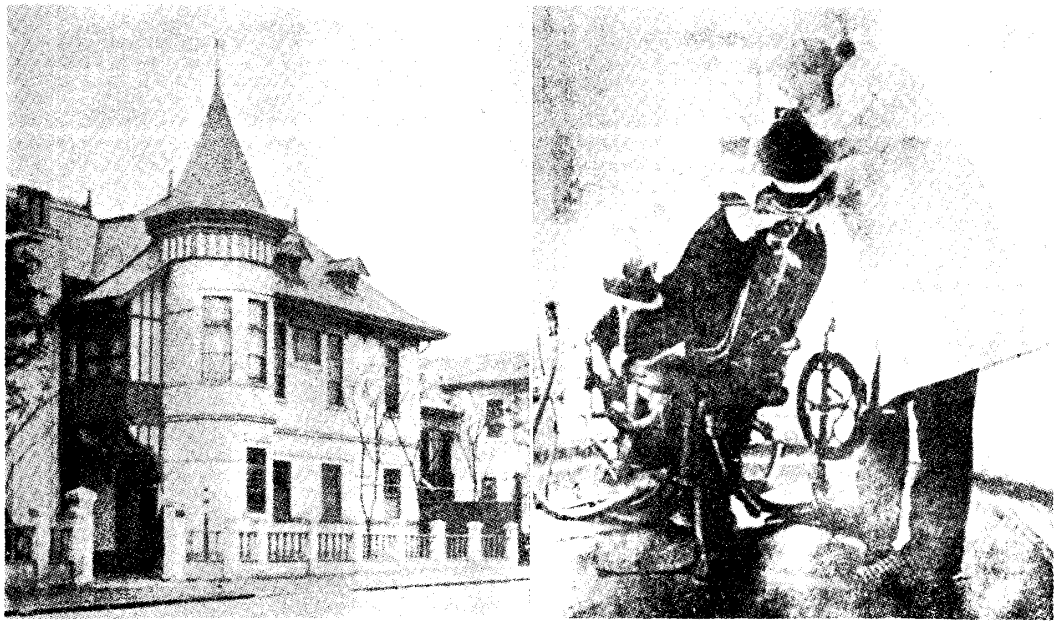

図 6 左：明治39年４月８日落成式を行なった血脇歯科診療所（白山通り側から撮影），右：治療中の血脇先生

Fig. 6 Modern Building of the Chiwaki Dental Clinic

表 1 授業時間割と担当講師　明治33年２月

Table 1 Time Table of the Curriculum as of February 1900.

曜日＼時間午後	１時限（６～７）	２時限（７～８）	３時限（８～９）
月曜	理学・森山	化学・森山	外科学・兒玉
火曜	黴菌学・遠山	組織学・奥村	歯科病理・奥村
水曜	病理学・金森	器械学・瓜生	器械学・瓜生
木曜	解剖学・新井	解剖学・新井	実地・曽根
金曜	生物学・遠山	生理学・遠山	治術学・一井
土曜	薬物学・石井	治術学・藤島	治術学・藤島

行）に記載の講師（担任および課外）には，遠山椿吉，大沢岳太郎，金森辰次郎，山極勝三郎らの医学博士・医科大学教授・助教授と，医学士・ドクトルの林曄，和田劔之助，金杉英五郎，田代義徳，長与稠吉，児玉林平，山田鉄蔵，小松緑，阿久津三郎ら，歯科医（師）としては，一井正典，ルイス・オトフィー，曽根竜蔵（D.D.S.）らと，血脇守之助，奥村鶴吉，石井葛次郎，中村重敬，塚原伝，瓜生春太郎，山村梅次郎，藤島太麻夫，榎本積一，青山松次郎，芥川恵迪，広瀬武郎らが名を列ね，さらに法学士太田光熙，工学士森山松之助らの名がいろは順に列挙されている．

賛助員としては，講師と重複しない者の中には，入江達吉，高木兼寛，北里柴三郎ら知名の人がいる．

顧問は，陸軍々医総監・男爵石黒忠悳，待医局勤務高山紀斎，中央衛生会長・貴族院議員長与専斎の3名であった．授業内容は6～9時の夜学であった[9]．

翌34年6月現在では，さきの講師の顔振れは，口腔外科学は新たに医学士山田弘倫に担当が変り，理・化学は森山が吉田吉に，遠山が中本清秀に，石井が和仁真一にというように多少の組替があり，血脇が歯科治術学および実地練習を担当するようになった．

なお年々多少の変化があり，専門学校昇格時の前後に大幅な変更があった[7,8]．

5. 教科書と定期刊行物

高山歯科医学院時代の講義録及5冊の教科書の他に，出版界では一般基礎医学書と多少の歯科医学書が刊行されていた．

東京歯科医学院開校と同時に，明治33～34年に東京歯科医学院講義録を継続的に発行（第一輯），同第二輯「歯科医学講義」（明35～37），第三輯「新纂歯科学講義」（明40～42）が引続き刊行された．また別に東京歯科医学院出版部から単行本として，広瀬武郎：簡明歯科薬物学，水野寛爾：歯科生理学，佐藤運雄：歯牙充塡学，佐藤：歯科学通論 前・後編，広瀬・水野：簡明歯科薬物学（再），歯牙発育出齦並根吸収表，第5対脳神経解剖図等が発刊された．

図 7 東京歯科医学院の講師陣（前列左より奥村鶴吉，佐藤運雄，白井（小川）勝一，後列左より早川可美良，花沢鼎，水野寛爾，（奥村帰朝間もなくの頃撮影）．

Fig. 7 Faculties of the Tokyo Dental College. Front row from left, Drs. T. Okumura, K. Sato, K. Shirai (Ogawa), back row from left, Drs. U. Hayakawa, K. Hanazawa & K. Mizuno)

歯科医学叢談は明治33年春より「歯科学報」と改題して，5巻1号より月刊となり今日まで続いている[7]．

かつて高山が外国雑誌に発表したように，血脇も日本の歯科医学発達史，教科書，歯科医育や歯科医師の状況等を1902年1905年の2回にわたりDental Cosmosに寄稿し，海外にPRする努力を惜しまなかった[11,12]．

6. 卒業生および同窓会

専門学校以前，特に高山歯科医学院時代には，医術開業歯科試験に合格して，歯科医の免許を得ることが，すなわち実質的な卒業であった．従って入学者に比して卒業生の数は大幅に減少した．卒業数は高山歯科医学院（明治28年6月以降）7回で53名，東京歯科医学院（明治33年3月は実質的に高山歯科医学院卒業生）7年半に8回で180名であった．

その間の入学者は1,112名，就学者・卒業者で医術開業歯科試験に合格した者は289名，と記録にある．（表2，図7）[3,7,8]

人口対歯科医の比は10万人対1名で，全国約

表 2　高山・東京歯科医学院　入学者及び卒業者統計（明22～39年度）

Table 2　Statistics of the Matriculates and Graduates of the Takayama & Tokyo Dental College (1889～1906 Fiscal Year)

	学年度	入学者数	卒業者数	医術開業試験合格	備　　考
高山歯科医学院	明治22年	26 名	0 名	0 名	22年12月創立
	23	36	0	0	
	24	76	0	8	
	25	25	0	15	
	26	48	0	14	
	27	54	10	14	
	28	75	16	0	28年5月第1回卒業試験施行
	29	74	6	0	
	30	72	14	0	
	31	58	7	0	
	小　計	544	53	177	
東京歯科医学院	32	96	6		33年2月1日（32年）度東京歯科医学院と改称学生を引継ぐ.
	33	132	3		
	34	129	22		
	35	163	22		
	36	175	32		
	37	167	22		
	38	269	53		
	39	144	20		
	小　計	1,275	189	290	
合　計		1,819	233	467	

〔注〕 大正4年10月発行「東京歯科医学専門学校総覧」史料による.
学年度の数字は実際には1年ずれている.
医術開業歯科試験合格者の各年度毎の合格者は別史料により判明したもののみを記入した.

400名の歯科医師の過半数は本校卒業生であった.

明治33年2月，東京歯科医学院発足とともに在来の「院友会」は「歯科協会」と改称し，「歯科学報」発行の母体となった．翌34年12月には総会で規則を改正，会名を「東京歯科医学院同窓会」と改めた.

この卒業生，同窓会の勢力を背景として，血脇は日本の歯科医政界に縦横に活躍，歯科医師法の制定を果し，歯科の業権の擁護に果した功績は大きい[3,7,8].

7. むすび

明治32年12月，無一物から出発した東京歯科医学院は，血脇守之助の学校経営に対する並々ならぬ熱意と努力により，明治40年9月遂に専門学校令による歯科医育機関にまで成長・発展した.

かくして，本邦唯一，最初の専門学校に昇格することによって，東京歯科医学院は，各種学校としてのその医術開業歯科試験受験予備校的使命を終え，専門学校附設機関として発足した東京歯科医学校がその役割を昭和3年まで継承した.

稿を終るに当り，本学会発表の雑誌「顕微鏡」

所載の第3図スライドを御恵与下さった日本大学松戸歯学部谷津三雄教授に深謝いたします.

文 献

1) 長谷川正康・森山徳長・石川達也・高添一郎・高木圭二郎: 高山歯科医学院の学制・教授陣・教科書等について. 日本歯科医史学会雑誌 12 (3): 183～190, 1986年3月.
2) 松宮誠一編: 血脇守之助伝. 東京歯科大学同窓会. 1979 (昭54) 年.
3) 血脇守之助: 高山歯科医学院過去及現在ノ状況 高山歯科医学院, 明治28年5月.
4) 血脇守之助: 歯科医学叢談 1～4巻 明治28年10月～32年10月.
5) 血脇守之助: 歯科学報 5～12巻 明治33年3月～40年12月
6) 日本歯科医師会: 歯科医事衛生史・上巻 昭和15年.
7) 東京歯科医学専門学校: 東京歯科医学専門学校総覧, 大正4年10月.
8) 東京歯科大学: 東京歯科大学創立70周年記念誌 1966 (昭和36) 年8月.
9) 東京歯科医学院: 東京歯科医学院講義録 第一号, 明治33年3月25日.
10) 今田見信: 続・歯学史料 医歯薬出版株式会社, 昭和47年7月.
11) Chiwaki, M.: The Recent Progress and Present Condition of Dentistry in Japan. Dental Cosmos 44: 805-811, 1902.
12) Chiwaki, M.: Dentistry in Japan. Dental Cosmos 47: 1201-1204, 1905.

ON THE CURRICULUM, TEXT-BOOKS, FACULTIES etc. OF THE TOKYO DENTAL COLLEGE

Masayasu Hasegawa, Norinaga Moriyama, Tatsuya Ishikawa & Ichiro Takazoe, Tokyo Dental College

(Read before the 14th Scientific Meeting of the Japan Society of Dental History, October 18, 1986, at the Tohoku Dentel College, Koriyama)

Takayama Dental College was inaugurated by Dr. Kisai Takayama in 1890 and had been the only reliable dental educational institution in Japan in the middle of Meiji ara (1868-1912). Total students matriculated till 1900 were 542, however, strange to say, only 53 graduated from the school during 1895-1899. Those who passed the national licensure examination have summed up to 173, which meant the actual graduation.

Because the social backgrond then was not mature enough and owing principally to the economical difficulty, Dr. Takayama had made up his mind to mandate the school to Dr. Morinosuke Chiwaki in December, 1899. He had entered Dr. Takayama's school in 1893, passed the licensure in 1895, and since then, had been appointed as lecturer and superintendent of the school.

Dr. Chiwaki renamed the school Tokyo Dental College, borrowed the lecture room of the Tokyo Microscopical College of Kanda-Ogawacho after sun-set, and started the new school from February I, 1900. He also began dental practice in Misakicho, Kanda. He must move his lecture room again in September to the Taisei Middle School in Misakicho.

Happily he could purchase by chance a neighboring building, of course by loans, next January, and repaired the interior of the old building of the Samurai-residence style. Thus an independent lecure rooms and Chiwaki Dental Clinic were born. Owing to the increase of the students, another class room was constructed in July, 1901, during the summer vacation.

Besides the school building, exellent faculties and good text-books were Dr. Chiwaki's utmost concern. He had laid special importance to reinforce the education of fundamental medicine to his students. He also issued a lecture-notes punctually, with the help of Dr. Tsurukichi Okumura as chief editor, not only for the out-students but also for

the students matriculated to grade up the teaching standard.

In 1905 a school-system legislation on the standardization of colleges was promulgated. Accordingly, he amended the school-curriculum to two and a half years for the future elevation of his school to the college standard.

Just about the same year, Tokyo Municipal Government made a large scale municipal street expansion plan and a big money was paid to him to compensate a part of his school site. He, of course, refunded the debt which was necessary to purchase the original school building, and sent Dr. Okumura to the Pennsylania College of Dental Surgery for study in the summer of 1904.

The faculty proper of the school as of 1900 were Drs. T. Hirose, T. Okumura, (graduates of Takayama Dental College) and Drs. U. Fukazawa (Hayakawa), T. Muto (graduated March 1900), Drs. K. Hanazawa, K. Mizuno & T. Kawakami (graduated 1902, 1903, 1907 respectively.) In 1903, Dr. Kazuo Sato who came back from the United States was invited as a professor.

Many professors of the medical schools, prominent medical doctors and practising dentists, some of whom studied abroad, were invited as lecturers in their respective fields.

Lecture-notes of the school were issued consecutively, first series 1900–1901, second series 1902–1904 and third series starting 1907 just prior to the elevation of the school to the college standard. These program, for the promotion of standard of lectures were one of the main policies of Dr. Chiwaki's successful management of his school, scientifically as well as economically. Of course, his faculties published many good textbooks successively in accordance with the lecture-notes and the school's official periodical "Shikwa-Gakuho".

As soon as Dr. Okumura's return from Pennsylvania, Dr. Chiwaki renovated the school system to three years begining from September 1906, appointing Dr. Okumura the superintendent of the school.

With the assistance of Dr. Okumura and other faculties, Dr. Chiwaki worked meticulously with the plan to elevate his school up to the college standard. In the summer of 1905, he began the construction of the new two storied wooden school building and his dental clinic which were planned by his long-time friend and lecturer of the school Matsunosuke Moriyama, B. Eng., brother in law of Dr. Takayama. New modern building was completed in March 1906.

Just this fall of 1906, the Dentists' law was promulgated, and dentistry became an idependent profession in Japan, apart from the medical profession. No dental school existed qualified as college standard. Dr. Chiwaki's Tokyo Dental College applied to the Ministry of Education in the spring of 1907 and it was granted in September 12, 1907, as the first college standard dental school in Japan.